令和5年6月7日（水）陸奥新報（2面）

弘大とプリメディカが動脈硬化で共同講座

高精度の予防モデルを

岩木健診データ活用、研究

弘前大学（福田眞作学長）と予防医療事業のベンチャー企業「プリメディカ」（本社東京都、富永朋代表取締役社長）は共同研究講座「予防医学推進学講座」を同大大学院医学研究科内に開設した。同社は動脈硬化症が要因とされる脳梗塞・心筋梗塞のリスク検査サービスを提供しており、共同研究では同大が19年間追跡収集している「岩木健康増進プロジェクト」の健康ビッグデータを活用し、その検査の予測精度向上などを図るとともに、より精度の高い動脈硬化症発症予防モデルの開発を目指す。（石田紅子）

講座の看板を掲げる福田学長（左から2人目）と富永社長（同3人目）ら

同研究科附属健康未来イノベーションセンター内に4月1日付で設置。研究期間は2026年3月末までの3年間。開設式が6月6日に同大医学部基礎校舎で行われ、福田学長、廣田和美同研究科長、中路重之特任教授、同社の富永社長、山岸俊哉執行役員らが出席した。

同社は循環器疾患をはじめ、生活習慣病やがん、認知症など病気のリスク検査に特化した検査サービスを展開し、全国3500以上の提携医療機関を通じて検査を提供している。

脳梗塞・心筋梗塞の発症リスクを調べる「ロックスインデックス」が代表的なリスク検査で、動脈硬化の初期段階に増える酸化したLDL（別名・超悪玉コレステロール）と、それと結合して動脈硬化を進行させるタンパク質を血液検査で測定しているという。昨年度の岩木健康増進プロジェクトの健診（通称岩木健診）から検査項目に入れている。

富永社長は同日、弘前市岩木地区で行われている岩木健診を見学したといい、「住民が健康増進を意識しているポジティブな雰囲気があった。他の参画企業が独自に調べている項目もあり、その項目との関連性も研究できるところが魅力」と述べた。

中路特任教授はカナダの内科医オスラーの言葉「人は血管とともに老いる」を引用して動脈硬化が老化の指標であることを説明し、「新しい（発症リスクの）予測式をつくることに期待している。（脳梗塞・心筋梗塞以外の）疾患の発症予測モデルの開発にもつながるのでは」と期待を込めた。